

## 研究会誌編集の思い出

中山 智子

今年、研究会誌が 30 号の節目を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。研究室の先生方と編集、運営委員会の方々のご尽力の賜物だと思います。

私が研究会誌編集に本格的に携わるようになったのは、博士課程後期に進んだ 1998 年からでした。それ以前の博士課程前期では、校正等の作業を多少お手伝いすることがあったものの、高木、重見、伊ヶ崎先輩方が博士課程後期におられ、主要な仕事は先輩方が引き受けてくださっていました。また、この頃は博士課程前期にも一学年上に南、山崎、頼先輩がおられました。計七名の大学院生がおり、研究室がにぎやかでした。仕事も和気あいあいと楽しく分担していたように思います。

1998 年には、運営委員会のメンバーが大きく変わりました。研究会誌 17 号の「教室短信」には「重見晋也氏は 1998 年 5 月から、名古屋大学文学部に助手として就職された」「伊ヶ崎泰枝氏はフランス政府給費留学生として、1998 年 8 月に渡仏された」とあります。他の先輩方も就職のため研究室を離れ、広島に残る博士課程後期の学生としては、私だけになりました。重見先輩に、名古屋に赴任される前にファイルメーカープロのソフトを使っての会員名簿の編纂を教えていただいたものの、その段階では、研究会の運営や研究会誌編集の苦労がまだ予想できていなかったように思います。

研究会誌の話からは多少はずれますが、私が卒論を書いた 1994、95 年から博士後期進学の 1998 年にかけては、執筆するための機器が日本で大きく変化した時期だったと思います。私は卒論を手書きしましたが、同級生の多くはワープロ専用機で卒論を作成していました。おそらく、この頃が手書きで卒論を書く最後の世代だったのではないのでしょうか。1995 年秋、留学のために私もワープロを購入し、帰国してからの修士論文もワープロで作成しました。パソコンはまだまだ高価でした。

自宅にパソコンを持っていなかった私は、仏文研究室のパソコンで編集作業を行っていました。重見先輩が主要なフォーマットを作ってくださいましたが、パソコンに不慣れだった私が研究会誌編集作業の中心になり、原野先生、松本先生をはじめ先生方にも大変お手数をおかけしたように思います。特に、原野先生にはパソコンの非常に初歩的な操作まで教えていただきました。「画面上で作成していた文書をちゃんと保存したつもりなのに、フロッピーディスクを抜くと画面から文

書が消えてなくなる」ことに神隠しでも起こったように驚き、原野先生の研究室に駆け込んだこともありました。先生は「フロッピーの文書を一度、画面上にコピーして作業すればよい」と丁寧に教えてくださいましたが、今から思うと自分の無知が恥ずかしい限りです。ある時は原野先生の研究室のパソコンを使わせていただき、編集作業を続けたこともありました。時間が遅くなり、帰られる前に先生はご自分の研究室の鍵を私に預けられ、その後も一人で先生のパソコンで作業を続けたこともありました。今から思うと、先生の研究室とパソコンを大学院生の私が一人で使わせていただいたのをもったいないように思います。その後、2000年にやっとノートパソコンを購入しました。

また、当時は、執筆者の中には原稿をワープロ専用機で作成される方もあり、パソコンとの互換性の問題から、フランス語の文字化けがよく起こっていました。誤字脱字のチェックは、元原稿と印刷用原稿との二段階で行い、一本の原稿につき二名の校正を経る形にしていたのですが、それでも誤字が残ってしまうこともしょっちゅうでした。ル・ディムナ先生も、ご自分の原稿について「パソコンの画面上で気をつけて直したつもりでも、印刷するまで分からない間違いがある」とおっしゃっていましたが、研究会誌ができあがってから「こんなところに間違いがあった」と気づき、悔しい思いをすることもありました。

当時編集した手元の研究会誌を見ると、自分の論文だけでなく、全体について、誤字等を手書きで訂正した箇所がいくつもあります。11月半ばの研究会誌発行の後、12月に行っていた合評会で、先生方から指摘を受けて訂正した箇所です。誤字が残る研究会誌は編集の責任者になった者として苦い思い出です。

編集を続けるうちに、複数の人が統一した書式で執筆するためには執筆要綱の役割が重要であることを実感しました。執筆要綱にそって校正していくなかで、論文の書式の基本的な約束事を身につけることができたように思います。

2002年8月から2年間、ナント大学に留学することになり、編集委員としての実質的な関わりは2001年の20号が区切りとなりました。

今から思い返すと、研究会誌は院生時代、論文の貴重な発表の場ただだけでなく、編集作業は苦労の中で有用な経験となりました。何より、一つの論文を印刷に値するものとして完成させるには多くの手間がかかることを身を以て知りました。現在、京都の大学のゼミで学生の卒論を指導する時にも、研究会誌編集時代を思い出し、毎年、執筆要綱を作成し渡しています。卒論の校正の手間は（当たり前ですが）研究会誌の論文の校正の比ではありませんが…

これからも研究会誌が継続、発展していくことを心から願っています。